

「花ソーセージでプロポーズ」

兵庫県 大恵 やす子様

「僕と結婚したら、毎日花ソーセージが食べれるよ。」

これが彼からのプロポーズでした。

大学で出会った私たちは学生でお金もなかったため、いつもお弁当持参でデートを楽しんでいました。ずっと実家暮らしで全く料理ができない私は、中に梅干を詰めただけのおにぎりを二つ作るのが精いっぱい。一方、広島から上京して一人暮らしをしていた彼は、朝昼晩と自炊する料理男子で、いつもおかずたっぷりのお弁当を作っていました。

そんな彼のお弁当には、毎回必ず入っているおかずがありました。それが、花ソーセージです。お花の形をした、可愛いソーセージ。関西では見かけない珍しいソーセージに、私は一瞬でとりこになりました。彼によると広島県民には馴染み深い食べ物で、お弁当や食卓によく並んでいるとのことでした。上京してからは母親がよく送ってくれること、実家の冷蔵庫には必ず一本は入っていたことなどを話す彼をよそに、私は花ソーセージの味が気になって仕方ありません。

彼の「食べてみる？」を待っていた私は、すぐさま一枚もらって口に運びます。するとなぜか初めて食べるのに懐かしい、ご飯とよく合うジューシーな味わいに、私はすっかり花ソーセージのファンになりました。

花ソーセージを楽しむにする私のために、毎回多めに作ってお弁当に入れて持ってきてくれる彼。「冷めてもおいしいけど、焼き立ては香りもよくてもっとおいしいよ。」と話す彼の横で、私は花ソーセージとご飯を頬張ります。そんな私に、「結婚したら、毎日花ソーセージが食べられるよ。」と、彼は笑いながらいつも言うのでした。

お付き合いを始めてから三年後、私は広島にある彼の実家を訪ねました。たくさんの手料理で出迎えてくださった食卓にも、やはり花ソーセージがありました。「お祝い事の中には、我が家では決まって出すのよ。」と、話す彼のお母さん。お母さんも実は関西出身で、花ソーセージを初めて見て一目惚れをした時の話などをしてくださいました。

それから十数年がたち、毎朝台所に立って花ソーセージを切り分ける私がいいます。フライパンで花ソーセージを焼いていると、「結婚したら、毎日花ソーセージが食べれるよ。」と、笑顔で話していた夫を昨日のように思い出します。

デートの日、プロポーズされた日、そして初めて夫の両親と会った日。夫との大事な思い出には、必ず花ソーセージがありました。そしてそれはこれからもきつと同じだと思えます。夫と歩み続ける未来に、これからも花ソーセージが共にありますように。